

四季の子ども ③

月と木の実の謳うた

川田学

(大学教員)

へそ曲り

自ら輝く太陽があり、その太陽の光で存在をあらわにする月がある。古来太陽と月は、光と影の、能動性と受動性のシンボルとなってきたのだが、その主従が逆転するのが秋だ。

この季節に、いつも思い出すことがある。かれこれ二十年ほど前のこと、信州の農家に住み込んでいた。千曲川のほとりに建つ母屋と離れ、高原野菜の広い畑、遠くには八ヶ岳を望むその場所で、私は二十歳の一夏を過ごした。毎日早朝から畑仕事に精を出し、若い手の指の関節すべてが筋肉痛になるような、厳しい労働だった。農家は三世代の大家族で、間もなく四人目の子が生まれようとしていた。その日の農作業が終わり、たそがれの中、母屋の前でほっと一息つく時間はすがすがしい。家長のおじいさんが、一日使った刃物を庭先で研いでいた。「シャコツ、シャコツ」とリズムカルな砥石の音を背景に、小一と四歳と二歳の三人の子どもたちが無邪気に遊んでいた。母屋からは、料理を作る音と匂いが漏れてくる。実に満ち足りた時間だった。

あるとき、一番上のA君が夕飯の食卓にいないことに気が付いた。どうも何かでへそを曲げた

川田学(かわたまなぶ)

北海道大学准教授。専門は発達心理学。子どもの見方を柔らかくする発達研究を模索中。著書：『0123 発達と保育』（ミネルヴァ書房）ほか。

らしい。ほうっておきなやー、というおばあさんの忠告を背に聞きながら、お節介な居候は彼を
探して家の中を回った。外はもう暗く、月が出ていた。

廊下の突き当たりに階段があり、その三段目くらいにちよこんと彼が座っていた。夏の間に日
焼けした顔は暗い階段に溶け込んで、丸い眼の白さだけが、窓からの月明かりに光っていた。私
は、不意の出会いにいささかひるんだ。正しくへそを曲げた子どもは、このように神々しい。そ
の前では、にわかな籠絡の試みなど無力であった。数分で諦めて、私は食卓に戻った。ほうつて
おけばいいんだよお、とおばあさんが言った。家族と居候たちの食事が終わった頃、彼は何も言
わず食卓についた。そして、母親も何も言わず、残った食事をまとめて息子に出した。翌朝、彼
はいつもの朗らかなA君に戻っていて、大きなランドセルを背負って、学校に行った。

ほうつておきなやーというおばあさんの構えと、一人空腹のまま己のへそ曲りと付き合ってい
たA君の姿が脳裏に残っている。ふと、遠くでドビュッシーの有名なピアノ曲が聴こえてくる。
そういうば、この作曲家には「Children's Corner」という作品もあった。「子どもの領分」。

思索的な子とは

何か事に出くわしたとき、すぐに行動しようとする人もいれば、起こった出来事を深く考えよ
うとする人もいる。谷川徹三は、前者を「行動的な人」、後者を「思索的な人」と呼んだ^註。私たち
の現実には、確かに行動的に働き掛けなければ打開できないことも多いが、思慮のない行動は問題
をいつそう根深くしてしまうこともある。だから、行動する人ばかりでなく、しぶとく考える人
が必要であると思う。

どこの園にも、思索的な彼女や彼がいるものだ。思索的というのは、空想的というのとも少し違う。空想的な子は、どちらかというと思考が連想的で速く、行動的であったりもする。言葉にするのも上手で、クラスの人気者になることが多いかもしれない。一方で、思索的な子というのは、鈍くさい^レという印象を持たれてしまう。「考えること」そのものが丁寧であるから、簡単には言語化しない(できない)。そのために、逆に、考えていない人と勘違いされてしまったりする。思索的な子の考えというのは、自ら光り輝こうとはしない月のようなものだ。でも、確実に、そこに存在している。そこにどう光が当たるか、光を当てるか。

太古の縄文時代に、私たちの祖先は定住生活を始めた。長い遊動の歴史から農耕型の社会になるまでの間をつないだのは、木の実たちの功績であったという。秋にたくさんの実りをもたらず列島だからこそ、農耕技術の未発達な時代の「定住革命」が可能だった。^{注2}それ以前の、一年中獣を追いかける行動的な暮らしに代わり、冬場の保存食を加工するための黙々とした作業の時間が、秋に生まれた。この時間が、縄文人に考えることを促したのかもしれない。独特の文様が付けられた土器は、ドングリを煮るために作られた。

秋と思索との関係はドングリが媒介している、と言ったら大げさだろうか。園庭で遊ぶ子どもたちのポケットにも、実りの秋がやって来る。辺りにはいつの間にかひんやりとした空気が混じっている。三歳児が、砂や草と一緒に、小さな手いっぱい握りしめたドングリを見せてくれる。両の手で挟むようにドングリを持って、顔の前でじーっと寄り目になっている子もいる。そのしぐさは祈りにも似ている。縄文の遺跡からは、幼子の足形を押しした土器片が見つかるという。^{注3}動き回る足から取ったにしてはきれいな過ぎるという。その土器片は、大人の墓跡から出るそうだ。

ドンダに支えられた暮らしは、祈りの文化とも深いつながりを持っているのではないか。

ある秋の事件

木の実といえば、以前、こんな事があった。長女の通う小学校で、お昼休みが終わって午後の授業が始まるうというとき、一年生の教室にあらぬ臭いが漂った。担任の先生は、学級の子のパンツを一人一人調べた。二十八人全員、無実であった。ところが、一人くさい子がいた。パンツは汚れていないが、臭いの源はどうもこの辺りではないか……。ふと、その子が制服のスカートのポケットに手をつ突っ込んで、ぐちゃぐちゃになった何かを出した。つぶれた数粒のギンナンだった。先生はおののきながらも、すぐに着替えさせ、やがて午後の授業が始まった。

その日、娘がなぜか下だけ体操服で帰ってきたので、理由を聞くと、右のてん末を話したというわけだ。中学生になった娘と、最近もこの話を思い出して笑った。

私「でもなんでまたギンナンをポケットに？」

娘「わあ、きれいな実だなと思ってさ、お母さんに見せてあげようとしたんだよね」

下だけ体操服で帰ってきたその日にも、同じやりとりをしたことを覚えている。墓跡の土器片の時代から、木の実たちはきつと豊かな物語を運んでくれたに違いない。

注

- 1 谷川徹三『哲学案内』講談社 一九七七年。谷川徹三は、詩人・谷川俊太郎の実父。
- 2 西田正規『定住革命・遊動と定住の人類史』新曜社 一九八六年
- 3 安田喜憲・阿部千春編『津軽海峡圏の縄文文化』雄山閣 二〇一五年